

「炬火祭」守り続け30年



伏見の三栖神社

燃え盛るたいまつを担いで街中を練り歩く三栖神社(京都市伏見区)の祭礼「炬火祭」(市登録無形民俗文化財)が復活し、今年で30年の節目を迎えた。担い手不足などで全国的に祭礼の存続が危ぶまれる中、若手も巻き込みながら伝統行事を守ってきた。7日夜の巡行に向け、氏子たちが気持ちを新たに巨大なたいまつ作りを進めている。

祭りの歴史は古く、壬申みづみの乱(672年)で大海人の皇子(後の天武天皇)が三栖村を通った際、地元の人たちがたいまつで夜道を照らしたとの伝説に由来する。

宇治川で刈り取ったヨシを束ねて巨大なたいまつを作る氏子たち

(京都市伏見区三栖町)

昭和の半ばに一度途絶えたが、青年たちを中心に当時を知る古老に縄の締め方を教わったり昔の写真を参考にしたりしてたいまつを製作し、平成になった1989年に復活させた。

近くの宇治川で刈り取ったトラック3台分のヨシで作るたいまつは直径120センチ、長さ5メートルと巨大で、1カ月かけて製作

昭和に断絶後、復活 巡行向け製作進む

する大仕事だ。9月から氏子らが毎週日曜に集まり、前年から自然乾燥させたヨシをたたいて成形し、束ねて芯を作る作業などに取り組んでいる。若者の姿も多く見られ、近くに住む保育士の内藤誠二郎さん(21)は「同級生も参加していて、皆で協力しながら一つのものを作るのが楽しい。いいものを作り、周りの人に見てもらいたい」と意気込む。

復活に携わった三栖・炬火会の佐藤克実相談役(69)は「たいまつが復活してみこしの担ぎ手も増え、祭りに活気が出た。高く上がる炎は迫力があり、ぜひ見に来てもらいたい」と話している。

当日は午後8時に中書島駅近くの三栖会館前でたいまつに点火し、出発。約30人の男衆で担ぎ、みこしを先導する。竹田街道を北上し、京橋まで巡行する。

(三鼓慎太郎)